

道心



禅昌寺通信「道心」第39号

編集 日光山 禅昌寺「道心」編集室

発行 平成23年1月1日

〒732-0002 広島市東区戸坂山根3-2-7

TEL 082-229-0618 FAX 082-229-0822

E-mail: zenshoji@etude.ocn.ne.jp

ホームページ <http://www.zenshoji.org/>

歴世の人 歴世の孫

禅昌寺住職 横山 泰賢

先般十月十七日、禅昌寺檀信徒並びに有縁の皆様
正式に住職として迎えられ、歴代住職の仲間入りをさ
せていただきました。これは私にとりましても、禅昌寺
にとりましても誠に有難い勝縁であります。禅昌寺開
創以来約四〇〇年間に二十三人の住職が居られ、私で
二十四人目となります。私から言えばこれまでの住職
二十三人を「歴世の人」(歴代の住職)といい、私自身
は「歴世の孫(次世代)」ということになります。第
二十三世正賢和尚は言つまでもなく、歴代の住職お一人
お一人が、その時々のお檀家様や信者様と共に歩まれ
た仏の道をお考え、その重みを感じます。また、禅昌
寺と、そこにあるお釈迦様の御教え(仏法)が、歴世の
人から歴世の孫へと継承されてきたことを思うとき、
深い恩義を感じます。

当山の西堂(住職の後見・指導役)である今村源宗
老師(大本山總持寺祖院監院)は、十月十六日に行われ
た、ご開山さまと歴代住職さまへの報恩法要で、次の漢
詩をお読みになり、正にその事をお示しでありました。

見歴世人歴世孫 歴世の人を見る歴世の孫

日光山裏恩義敦 日光山裏恩義敦し

風吹玉露爽秋氣 風は玉露を吹いて秋氣爽やかに

雲起林巒蔭後昆 雲は林巒に起こって後昆を蔭う

「意訳」

歴代の住職を見て、次世代は学び育つ

そうした日光山(禅昌寺)における恩義は敦い

風は玉露(露のような一世代)を吹いて、秋の気配
が爽やかだ

雲(世代を務める禅僧)は、林に育つ木のように断
ち切れず続いて起こり、後の世(次世代)をたすけ
護だろう。

このお示しは、晋山式が行われたことを顕す為に、
本堂正面に建てられた角塔婆にも記されておりすが、
一世代の住職を務める重みと責任を深く伝えていると
感じました。一世代の住職を務めると言うことは、こ
の禅昌寺とお釈迦様の御教えを次世代に継承していく
という既に三九五年間続いている大行持であります。
これが継続され、またされていくということは、住職
独りのなせることではありません。お檀家さま信者さ
まあつての継続であり大行持であります。

私は、この大行持を皆様と共に修行する喜びを皆様
と共に味わいたく、より一層精進努力していきたいと
思います。



後姿での 説法を聞け

愛知専門尼僧堂

堂長 青山俊董師

従容録 第七則 葉山陸座

拳す。葉山久しく陸座せず。院主白して云く、大衆久しく示誨を思ふ、請う和尚、衆の為に説法し玉え。山、鐘を打せしむ、衆方に集る。山、陸座、良久、便ち下座して方丈に帰る。主、後に随つて問う、和尚適来、衆の為に説法せんことを許す、云何んぞ一言を垂れざる。山云く、経に経師あり、論に論師あり、争でか老僧を怪み得ん。

後姿での説法を聞け

葉山さまの高徳を慕い、その会下には多くの雲水が集まり、同行同修の朝夕が過ぎていった。だが、この処久しく葉山さまの御説法がない。そこで院主（会社なら事務総長、店なら番頭のような役職が願い出た。「修行僧達が久しく御住職さまの御説法を待ち望んでおります。どうぞ、修行僧のために御説法をしてやってください」と。「では鐘を打つて皆を集めるがよい」というので、御説法を知らせる鐘が一山に鳴り渡り、修行僧達は久々に御住職さまの御説法を聴聞できると、心おどる思いで集まつてきた。

檀上に登られた葉山さまは、しばらく黙つて坐つておられたが、一言も御説法もないうまに檀を下り、方丈の間に帰つてしまわれた。院主はあわてて葉山さまを追いかけておたずねした。「先ほど、修行僧達のために説法してやろう」とおっしゃったのに、何故一言の説法もして下さらないのですか」と。葉山さまは答へられた。「経の解説には経の講釈師がいるし、論理学にはまたそれを論ずる学者がいて、それにまかせておけばよい。私は講釈師でも学者でもないよ」と。

私は大學に十一年も遊ばせてもらった。大學へ残れという呼びかけもあった。学者の道も政治の道も、私には魅力がなかった。すべてをことわつて山寺へ帰り、師と共に田畑を耕し、蚕を飼い、そして修行道場で

零から出発する雲水達と、共に行ずるという道を択んだ。都での一見はなやかな、一見出世したかに見える道のすべてを断つて山寺へ帰り、土にまろんでいる私の姿を、一部の人は不思議な思いで眺めていたという。このまま都にとどまつて勧められた道を歩んだら、私の心の田が荒れてしまふ。そんな危惧をいだいて、さつさと帰り、また垢づかぬ新発意の雲水との、一日二十四時間態勢の修行生活という道を択んだのだが。そしてその姿勢は四十年來、今日まで変つていない。この選択はあやまりでなかった、と今も思っている。

経や論は、料理でいうならば、献立であり、文字や言葉を使つての料理法の説明にすぎない。どこまでも実践するための手引にすぎない。具体的に実践して見せる。経とか論はたつた一度の大切な、しかもやりなおしのきかない私の人生の今を、どう生きたらよいかを文字や言葉で解説したものの、それを具体的に今ここで、目の前で、行住坐臥のすべての進退の上に生演奏して見せる、これを身業説法という。葉山さまは文字通りこの身業説法を毎日朝から晩までしつづけておられるのだから見る眼、聞く耳を持たない者には見えず聞くこともできない。残念ながら番頭の院主さきも、葉山さまの深いお心を理解することができなかったのである。

昔から「親のいう通りにはならないが、親のする通りになる」といわれ、「親の後

姿をみて子供は育つ」と語りつがれてきた。「いう通り」というのが、ここでいう言葉の説法であり、経師、論師のお役といえよう。「親のする通り」、または「後姿」という言葉で語りかけようとしている心が、黙つて実践することであり、「親の毎日の生き方そのものこそ大切」ということではなからうか。

師急ぎ説き、弟子急ぎ聞け

ある日お釈迦さまのところへ一人のバラモン（仏教以外の宗教者）がやってきて、「言葉で語って下さってもよいし、言葉なくしてお示し下さってもよいが、一番大切なところを御教示ください」……有言を問わず無言を問わず……といってきた。お釈迦さまはしずかに端坐し、いつくしみの眼でバラモンを見つめられただけで一言もおっしゃらない。二人の間に静寂の時が流れ、やがてバラモンは立ち上がり、ふかぶかと礼拝し、「お釈迦さまは大慈悲をもつて私の迷いの雲を払って下さいました。ありがとうございます」と、お礼の言葉をのべて立ち去った。

後方でこの一部始終を見ていた侍者の阿南尊者が、お釈迦さまにお質ねした。「バラモンはどういう道理がわかったのでしょうか」と。お釈迦さまは答えられた。「世間でいういわゆる駿馬しゅんばと呼ばれる馬が、振り上げた鞭の影だけを見て走り出すようなものだ」……世の良馬の鞭影を見て行くが如しと。そしてさらに「四馬」の例えの話をされた。

馬に四種類ある。第一は振り上げた鞭の影だけを見て走り出す馬で、駿馬と呼ぶべきであろう。第二は毛の先にふれてから走り出す馬、第三は肉にふれてから走り出す馬、最後の第四は骨身に徹しないと走り出さない馬で、世にいう驚馬おどろばというべきものであらう。

いったい何をいおうとするのか。第一の鞭影を見て走り出す馬というのは、遠い村や町で亡くなった人があるということを伝え聞いて、わがことと受け止め、ウカウカしておれないぞと立ちあがる類の人だという。第二の毛のさきにふれてから走り出す馬というのは、自分の村や町で亡くなった人の話を聞き、めざめる人のことをいい、第三の肉にさわってから走り出す馬というのは、親とか兄弟とかいうように、自分の親族の中から旅立つ者が出たとき、遅ればせながら気づく者、第四の骨身に徹しないと走り出さない馬というのは、自分自身が迎えに来られないと目がさめない類で、これでは間にあわないという。

道元禅師はこのお釈迦さまの四馬の教えを引用された後に、「師いそぎ説かんと思ふべし。弟子いそぎ聞かんとねごうべし」という言葉を添えておられる。

私はよくお葬式のあとなどにこの四馬の話を紹介し、葬式の大きな意味の一つは、死者の最後の遺言を聞くところにある、と語る。

先に逝かねばならない人が、全身心をあ

げ、後に残る者たちに遺す最後の一言があるとするれば、それはなにか。

「死ぬんだよ。あなた方も。必ずこの日がやってくる。しかも予告なし、まったなしに。いつお迎えが来てもよいように、毎日、毎時間を大切に生きなさい」、これが死者の最後の、あとに残る者へ贈る一言ではなからうか。

死を忘れたら生もぼける。死を見すゑ目が深いほど、今日一日いただくことが出来た命の重さもわかる。命の重さがわかれば、その命をどう生きたらよいのかも見えてこよう。日常のことにかまけてとかく死を忘れ、あるいは忘れようとしているわれわれに、命をかけて死を眼前につきつけ、しつかり生きよ」と語りかけてくれる、その声を全身心をあげて聞くとともに葬式の意味があろう。

またそうして死者の声を聞き、めざめ、立ちあがり、根性が入った毎日の生き方をするところこそが、死者への最高の供養なんだと、喪主や会葬者たちに語りかける。

お釈迦さまが無言でバラモンに示された往古の姿に重ねて説かれたものであらう。説く者も言葉を用いると用いないとにかかわらず、そのすべてが説法であり、また教えを請う側、学ぶ側としては、師たるべき人の日常生活のすべてから、いきいきとした説法を聞きとり、学びとってゆかねばならないのである。

仏教徒としての生き方

東堂 横山 正賢

修証義 第四章

発願利生 第十八節

菩提心を発すといふは、己れ未だ度らざる前に、一切衆生を度さんと発願し営むなり、設ひ在家にもあれ、設ひ出家にもあれ、或いは天上にもあれ、或は人間にもあれ、苦にありといふとも、楽にありといふとも、早く自未得度先度佗の心を発すべし。

修証義の第三章までは仏教の基本的な教義と、自己の目覚めと戒めを促された内容となっておりまし。第四章からは仏教を実践する具体的な教えとなっておりまし。

第三章の終わりに、「是を無為の功德とす、是を無作の功德とす、是れ菩提心なり」と結ばれ、第四章に「発願利生」を起こされた処に、道元禅師が私たちに對し、「二大事因縁を戴いて授かつたこの命を疎かにするなよ！」と祈りを込めてお説き下さっているように私は思うのであります。

地球上の生き物の中で、人間以外の生き物は自然に任かして活かされております。人間も活かされていると言うことは基本

的に、他の生き物と同じではあります。人間は自由な思考で生きることの出来る唯一の生き物であります。しかし人間はその命の営みの中で、身勝手な価値観を持つて試行錯誤するのであります。

人間という動物に持たされている煩惱という毒に犯されると、自己中心の刹那的な虚しい生き方もあれば、煩惱を智慧とエネルギーに発展させて、授けられた限りある命を普遍的に生かせる知恵も授かつていることを、この節は目覚めさせようとしているのであります。

「発願利生」というのは、己の命に目覚めて衆生の利益に生きる願いを發すと云う意味です。

若いころは「己の命に目覚める」という意味がよく分かりませんでした。私がこの言葉に初めてであつたのは、二十歳で出家し京都大谷大学から、宗門の駒沢大学に転入学して出会つた、明治・大正から昭和四十年代まで現代の傑僧と称された、沢木興道老師の参禅会に参加した時でした。

その頃は「自己の正体とは何ぞや！」ということで、学友と議論し参禅を繰り返す、無我夢中の日々でした。

このようにして、自己の正体、自己の正体、自己の正体と自己に向き合おうとしますと、つかみ所のない自己に行き着くのであります。つかみ所のない自分に、何故、何故、何故と疑問を振りかざしますから、師匠に疑問を問ひかけますと、師匠は理不尽にも「理屈をぬかすな！」と一喝されるのです。素朴な質問を投げかけたつもりで

したが、「理屈をぬかすな!」「何故、何故、何ではが理屈なんや!」と来る日も来る日も問ひかけるのです。

ある疑問は数日たつて、またある疑問は数ヶ月も費やして、雑巾掛けをしていても、庭の掃除をしていても、無念無想となつてしろと云われる坐禅の時も、何故、何故、何故と向き合つておりますと、ある日突然に「あつそうか!」と臍落ちするのであります。

そのうち「ただ雑巾掛けをしている」「ただ庭掃除をしている」「ただ坐禅をしている」ということに気づくのです。この時師匠が「理屈をぬかすな!」と一喝された意味が理解できたのです。頭で理解しようとする弟子に對して、生命の営みとして体得させようといふ一喝して下さったことに気づかせていただくのです。

仏道修行の素朴な疑問は頭で理解し納得するのではなく、身体で体得すると云いますか、大げさに申しますと、此の全身全霊を以て、命の営みとして行なわれる様を、無為、無作というのです。

「菩提心を發すといふは、己れ未だ度らざる前に一切衆生を度さんと發願し営むなり」と、私達の生き方をはっきりとお示し下さっております。

活かされているという己に目覚めたならば、その生き方は、「一切衆生を度たさんと發願し営むなり」とありますように、たとい苦にありとも、楽にありとも、己が活かされている自然を敬い、他を敬い、他が活かされる生き方が、命の営みの基本であることを、お示し下さっております。

お授戒会雑感

東区 達富 康夫

平成二十二年十月に禅昌寺で開催された一連の式典、即ち今日の禅昌寺繁栄の基礎をつくられた正賢東堂の「禅昌寺二十三世退董式」、代わって方丈となられた泰賢新命和尚の「禅昌寺二十四世晋山式」、更にこれ等の



禅昌寺二十三世退董・二十四世晋山式

式典に前後して行われた「二十四世晋山式記念授戒会」は、戦後広島では初めて開かれる式典と聞いてはいたが、遙かに想像を超える堂々のものであった。

最初は五日間も耐えられるのかと思っていた「お授戒会」も、同門の僧侶の皆さんでもめったにお目に掛れないと云う大本山永平寺貫首福山諦法禅師を戒師さま、また数多い尼僧さまの中でも最高位の愛知専門尼僧堂長青山俊董老師を説戒師さまとして迎え、その他百名に近いのではないかとと思われる僧侶さま尼僧さまの献身的な運営により、気が付いてみると式典のなかに没頭し溶け込んでいた自分を思い出す。

福山諦法禅師を始めとする厳格な式典の進行と、青山俊董老師の的を突きつてもユーモアと多少の皮肉を交えたウイットなお話が、お授戒を授かるメンバーの心に、ゆとりを持ちつつも一本筋の通った思考の形成を導いて頂いたからだと思う。

何日目であつたかは忘れたが、帰りのタクシーが来ないと言つてわめき立てている人を見て、「今青山老師から話を聞いたばかりではないか……」と思つたが、自分も同じ目に会っていれば同じようにしていたかも知れないと気がついたのは、多少説戒のご利益があつたのだろうか。

青山老師の「集合写真を見ると、まず最初に自分を探す。そして自分が上手く写っているとこれはいい写真だとなる。」「学校の運動会では親は自分の子供しか目に入らない。自分の子供の写真ばかり撮っている。」というお話を

伺つたが、最終日の晋山式の際、新命和尚の入山を先導する五十名余のお稚児さんに付き添つた親たちが、その場の状況や雰囲気を感じていないのか、子供と一緒に本堂に上がり込んだり写真を撮ったりする様をみて、時代や教育・躾の変化を苦々しく感じたが、一方でお稚児さんの無邪気で可愛いらしいことにも気がついたのは多少の進歩であつたのだろうか。

無事お授戒会が終了し、戒法とその証の血脈を授かつた後で、私の顔をみた東堂さんに「随分穏やかな顔をしてられますよ」と云われ「本当にそうかな?」とは思つたが、内心満ち足りた清々しい気持ちがついていたことは云うまでもない。

自分の意に反する事を云われると、殆ど瞬時に間髪を入れず何でも反論するのが私の性分であるが、お授戒会の後では多少緩和したのではないかと思つている。

お陰で日常茶飯事起つていた家庭内の小さないざこざが随分減つたようで、これは自分が多少は一旦受け止めるゆとりが出来た為であり、一段階段を上ることが出来た所以と考えてはいいるが、本当のところは家内や娘の評価を聞かないと分からない。

東堂さんに「お寺の寺報」への投稿を依頼され、思いついて「お授戒会雑感」として書いてみたが、十月の式典が終わってから約二ヶ月経つ現在、改めて振り返ってみると一段上つたと思つていた階段を何時の間にか元に戻りてしまつていてはないかという気がしてきた。本当に自分は今でも穏やかな顔をしているのだろうか?

◆道心趣味の会◆

短歌

- 元日に国旗立つ家まばらなる
ここにも時代の変化来ており
- 冬深く縁に射しいる木漏れ日は
玉虫いろのひかり照り映ゆ

東区 矢野 淑子

俳句

- 初日の出水平線を溶かしつつ
- ストープの煙あたたかく昇る峽
- 雪を来る赤いバイクが年賀状
- 冬ごもり人あたたかく迎えおり
- 若水を溪流に汲み魚守り
- ふかふか布団ふくらむ日向

廿日市市 伊藤 順二郎

- 山茶花の垣根の続く佛道
- この道を貫き通し針供養
- 割烹着びしりとつけて風邪を断つ

東区戸坂 青笹 俊枝

◆行事報告◆(八月～十二月)

- 孟蘭盆会法要
八月六日(木)午前十時半より
例年同様の参拝者で賑わった。
- お受戒会
十月十三日～十七日
報恩授会百四人の方が五日間の授会に就かれました。

- 二十三世退堂式(十月十六日)
二百人を超える参拝者で東堂様の勞をねぎらいました。
- 二十四世晋山式(十月十七日)
新命住職は総代さんを始め、五十人のお稚児さんの先導で山門に到着し、三百人を越える参拝者に迎えられました。

- 第四回 西国三十三観音霊場巡り
十一月十一日～十二日

第二十番善峰寺～二七番円教寺・番外花山院まで、参加者二十二人が行く先々の紅葉に感動しながらの巡拝となりました。

- 年末諸堂大掃除
十二月十二日(日)午後一時～

四十人ほどのご奉仕で一時間半程で終了しました。お疲れ様でした。

- 臘八摂心坐禅会
十二月一日(朝から)～八日(朝まで)

少人数の参加者でしたが、無事につとまりました。

◆行事案内◆(一月～四月)

- 年頭坐禅会
正月元旦午前八時より
- 新年修正会(大般若祈禱会)
一月元旦 午前十時より
- 彼岸会法要・護持会総会
三月十七日(木曜日)午前十時半より
今年よりお彼岸会法要並びに護持会総会は毎年三月十七日開催に固定させていただきます。
- 第五回西国三十三観音霊場巡り
四月七日(木曜日)～八日(金曜日)

第二十八番～第三十二番まで

※この旅行は天橋立から琵琶湖北側から竹生島から南側にかけての観音霊場巡りです、何れのお寺も桜の名所と云われるお寺が多いコースとなっております。皆様のご参加をお待ちしております。

参加費は二十名の時 三万六千円
参加者二十五名の時 二万九千円

- 伊藤 優さんピアノコンサート
四月二十三日 土曜日
詳しくは後日発表いたします。

毎月定例行事

- 上田宗箇流茶道稽古日
毎月一回 第四金曜日午後一時から
※お抹茶と和菓子を気軽に楽しむつもりでご参加下さい。

御詠歌の会

- 第二金曜日午前十時より自主練習
第四金曜日午前九時より講師を招いて練習 昼まで
※茶道の稽古及び御詠歌の稽古は講師の都合により変更する場合もあります。初めて参加される方は、電話にてご確認ください。

毎週定例行事

- 暁天坐禅会 月曜日～金曜日
毎朝午前五時半～六時十分まで
- 水曜坐禅会
午後七時より坐禅・茶話会 終了八時半
- 婦人坐禅会 毎週金曜日
午後一時より坐禅・茶話会終了三時
(第一金曜日のみ坐禅の後、写経・茶話会)

西国三十三ヶ所観音霊場参拝(第五回)

- 平成23年4月7日(木)～8日(金)
- 集合場所 JR広島駅新幹線口予定
(ホテルメッツ広島玄関前)
- 集合時間 午前6時50分(時間厳守)

4月7日(木)

7:00 広島駅

7:10 不動院前

7:20 中筋駅

7:25 広島IC

→山陽・中国・舞鶴道

天橋立IC

(28) 成相寺?

(29) 松尾寺?

琵琶湖湖畔(泊)

4月8日(金)

8:30 琵琶湖湖畔

長浜

9:00 島宝厳寺?

(30) 竹生

11:20 長浜

(31) 長命寺

(32) 観音正寺

竜王IC

→名神・山陽自動車道

広島IC

中筋駅

20:40 不動院前

21:00 広島駅

＜琵琶湖湖畔＞
長浜ロイヤルホテル
☎ (0749) 64-2000
旅費(概算): 20名の時 36,000円
25名の時 29,000円

※最少催行人員: 20名
食事: 朝1食・昼2食
添乗員同行
※旅行代金には船舶代(長浜～竹生島間)、タクシー(長命寺、観音正寺)が含まれます。(旅行代金は参加者数の増減により変動する場合があります)

原稿募集

皆様の随筆、旅行記、体験談、趣味の短歌俳句など何でも結構です。お寄せ下さい。